

大正十四年

(挿入紙)

跡見花蹊様

文化元 甲子年 下元始 七赤
元治元 甲子年 上元始 一白
大正十三甲子年 中元始 四緑

右、文化甲子年以後二生レ、大正甲子年迄長寿ナレバ、則三元ニ通ズ。御同様ニ下元ノ誕生ナレバ、何卒大正甲子年迄長生シ、三元生ノ号ヲ現実ニ称センコトヲ祈ル。

武田信達誌

(一月)

一月一日 乙酉 木曜 天晴朗。

朝五時起。四方拜。祖先祭。家内一統無事。七時一同着座。新年御めて度の礼ありて、椒酒雑煮を祝ふ。予、李子、智子、経子、井上、朝倉、岡村、広橋、関、岡縫子、なみ子、学校十一人也。賑々敷御祝済。九時より自動車にて、予、李子、智子、経子と三人にて明治神宮に初参拝する。天気よく風なく長閑に春三月の如し。うやくしく参拝して有かたし。初参詣人の口しく、実に国民の勤王の志願れて嬉しく有かたかりけり。はた自動車にて首尾よく帰宅ス。此時、井上氏をはじめ一同電車にて参拝ス。

*御めて度(御目出度)

一月二日 丙戌 金曜 天晴朗。

御雑煮は一日一日として賀客を請る。夕景、酒井伯、葉室伯、夕餐を供(共)にして後、謡そめする。朝の写経はしめる。

*供に(共)

一月三日 丁亥 土曜 天晴朗。

朝の写経済て、石山基威氏来りて、例年の通り自動車にて御機嫌奉伺に参る。九時より第一番に東宮御所、閑院宮、高松宮、北白川宮、竹田宮、東久爾(邇)宮、朝香宮、東伏見宮、秩父宮、山階宮、賀陽宮、御所え御機嫌奉伺申上て、花松典侍御扱にて御椒酒、御菱、花ひら、御菓子等戴て退出。宮内大臣梨本宮にて先々本年も無事年賀済、后一時半也。此夜、甘利氏来て、初ひきそめいたしたり。

*高松宮(タカ松宮)

一月四日 戊子 日曜 陰。

朝の写経済。李子ハ朝より方々へ参礼に行。此日有約て大久保幸治氏来りてトルコ国通二付、トルコ風義時状演舌ス。九時済て帰。

*トルコ風義時状(トルコ風義事情)

一月五日 己丑 月曜 晴。午下より曇天。

朝の写経済。万里小路すみ子、房州より帰。

一月六日 庚寅 火曜 晴。

朝の写経済。

一月七日 辛卯 水曜 晴。

朝の写経済。本日は扇子四十五本揮毫す。

一月八日 壬辰 木曜 天晴朗。

朝の写経済。朝十時学校記念日、今年ハ学校創立滿五十年記念にて大盛会之はつなから、一月の事故、準備も出来かねたるに付、愈四月九日記念祝典を挙るはつに相成たり。此日は職員一同勅題の哥を扇子に書て、職員一同え贈る事にいたり。

*はつ(答) *はつ(答)

一月九日 癸巳 金曜 晴。

朝の写経済。朝九時より学校校長はしめ職員、生徒一同、式場に参集、始業式執行ス。昼迄にて済。夫より李子、主事、其外も同行にて白子え行て帰。来客、高はし照子、小児ヒデを連て来る。午餐を供にする。

*高はし照子(高橋照子) *供に(共に)

一月十日 甲午 土曜 雪。

朝より雪にて一寸余積る。来客、竹内氏、越後極楽寺より帰京す。有かたき御咄し共に夕食を供にす。

*供に(共に)

一月十一日 乙未 日曜 天晴朗。予記 三島氏念仏会。

朝の写経済。十二時より、予、李子、智子、三人自動車にて三島光明会に参集ス。念仏三昧にて五時帰。

一月十二日 丙申 月曜 晴、風。

朝の写経済で、学校業はしめ、十時より后一時まで。

一月十三日 丁酉 火曜 晴。
朝の写経すむ。

一月十四日 戊戌 水曜 晴。 予記 午後一時、愛国婦人会。
朝の写経済。午後一時より、予、李子と愛国婦人階行社に行。総裁東伏見宮妃殿下に拝謁する。四時頃済て帰。

*愛国婦人(愛国婦人会) *階行社(偕行社)

一月十五日 己亥 木曜 晴。

朝の経写済。あつき粥を祝ふ、例年の如し。

*経写(写経) *あつき粥(小豆粥)

一月十六日 庚子 金曜 陰。

朝の写経済。来客、鈴木すみ子、竹内夫婦。

一月十七日 辛丑 土曜 晴。

朝の写経済。李子、横浜、鎌倉え年礼に行。来客、石山基陽。

(一月十八日、十九日、記載ナシ)

一月二十日 甲辰 火曜 予記 正十時より午後迄、唯信会、会費老円五十銭。小伝馬町
団光寺にて野田松操院一周忌。

*団光寺(円光寺)

一月二十一日 乙巳 水曜 予記 午下一時半より常楽寺にて地明会。

(一月二十二日、二十四日、記載ナシ)

一月二十五日 己酉 日曜 予記 善光寺婦人会、午前十時より。

(一月二十六日、三十一日、記載ナシ)

(二月)

(二月一日〜九日、記載ナシ)

二月十日 乙丑 火曜

発信 岡山市揃馬場七南画協会え絹本返却、依頼物断。香川県小豆郡苗羽村木下栄十郎、断は(端)書出。岡山県川上郡富家村得能弁太郎、断。

(二月十一日〜十四日、記載ナシ)

二月十五日 庚午 日曜 晴。

(コノ日、記事ナシ)

二月十六日 辛未 月曜 予記 午後六時、帝国ホテル、五島、賀茂結婚披露会。

(二月十七日、記載ナシ)

二月十八日 癸酉 水曜 予記 光明会。

二月十九日 甲戌 木曜 予記 本郷本富士町二前田利為殿、酒井菊子殿結婚披露会、帝国ホテルにて、午下六時。

(二月二十日、記載ナシ)

二月二十一日 丙子 土曜 予記 井上哲治郎女高子、石田幾知次男寿と。

午下五時より帝国ホテルにて井上高子と石田寿と結婚披露会に出席ス、予、李子と。

(二月二十二日〜二十五日、記載ナシ)

二月二十六日 辛巳 木曜 晴、夜雪。 予記 渡辺七郎子結婚披露会、紅葉館にて。

午下四時より子爵渡辺七郎殿、林興太女従子と婚儀式二付、紅葉館二行。四時より式始る。畢而点燈比より親子兄弟親しき親戚のみ三十人計にて宴会始り、八時畢而帰。

(二月二十七日、記載ナシ)

二月二十八日 癸未 土曜 雪。

午後早々、五年生教授、四時迄。

(三月)

三月一日 甲申 日曜 晴。
来客、河鱈為子、津田仕人静女。

三月二日 乙酉 月曜 晴。
朝十時前より五年一ノ組二時間教授。

三月三日 丙戌 火曜 晴。
此日、土井早苗子より誘れ、予、李子ト午後二時半より自動車にて歌舞扶座へ行。震災後新築にて、実に立派も立派も未曾有にて驚々入たり。この大入は何事ぞ。明日楽になると云。立錐の地もなき大入。世の中無しゆんして居る。十時半比済て帰、十一時。
*歌舞扶座(歌舞伎座) *無しゆん(矛盾)

三月四日 丁亥 水曜 晴。
朝より揮毫ものす。午下、河はた子え行。夜、竹内夫婦来る。中島徳蔵様御依頼ものに御出也。午下河はた子え行て帰る。

*河はた子(河鱈子) *河はた子(河鱈子)

三月五日 戊子 木曜 晴。
朝より終日揮毫ものす。甘利氏来る。

三月六日 己丑 金曜 晴。

此日より、静女、河はた子え御やとひ入になる。

*河はた子(河鱈子) *やとひ入(雇ひ入)

三月七日 庚寅 土曜 晴。
土曜日ながら五年生教授、午下三時まで。和慰会、琴平神社葉室伯社宅にて。

三月八日 辛卯 日曜 晴。
日曜ながら朝九時より五年二教授する、午下三時まで。来客、五島新夫婦 御礼にきたる、渡辺子爵新夫婦 御礼に。

三月九日 壬辰 月曜 晴。 予記 稲田きみ子、午下三時に。

明かたの夢に二首のうたをよみて。

来客、京都円山応鶴女、応挙ノ百三十年記念ニ付、金地色紙を、稲田きみ子。

三月十日 癸巳 火曜 晴。

(コノ日、記事ナシ)

(三月十一日〜三十一日、記載ナシ)

(四月)

四月一日 乙卯 水曜 予記 指原乙子行。

四月二日 丙辰 木曜 予記 校友会員寄合、五十年記念の相談会。
李子、井上、浅倉、三人連にて夜の八時十分之汽車にて京都へ行。

*浅倉(朝倉)

四月三日 丁巳 金曜 晴。

終日生徒の画を見る。

(四月四日、五日、記載ナシ)

四月六日 庚申 月曜

予記 午下五時より山階芳丸、酒井寿賀子、帝国ホテルにて御披露会。

四月七日 辛酉 火曜 予記 午下五時華族会館ニテ大島陸太郎、藤堂鈺子結婚披露会。
河はた子へ行。

*河はた子 (河鱒子)

四月八日 壬戌 水曜

朝三時何分、いく子、女子出産、安産也。此日に生るゝとは何たる有難き事哉と賞賛いたしたり。予、李子、広橋寿子、万里すみ子と歌舞妓へ行。

四月九日 癸亥 木曜 晴。

わか誕生日にて皆々え御すもしを祝ふ、大阪すし也。

(四月十日、記載ナシ)

四月十一日 乙丑 土曜 予記 閑院様、東伏見様行。

四月十二日 丙寅 日曜 雨。 予記 校友会役員より合。

朝十時より自動車にて、余、智子さま、徳永と三島子え念仏会二行。三時畢而帰。李子、六時四十分汽車にて房州万里家二行。

*より合(寄合)

四月十三日 丁卯 月曜 晴。

学校ハ生徒体格検査執行。来客、増田小とみ。

(四月十四日、記載ナシ)

四月十五日 己巳 水曜 雨。

午下一時より鳥尾子にて花見会に行。三弦合奏あり。藤田鈴朗氏も来る、面白く。夜九時帰。

四月十六日 庚午 木曜 晴。

午下一時より自動車にて加藤総理邸ニ 奥様面会、牧野内大臣邸え 奥様面会、東伏見宮邸え 糸島二逢、鎌田栄吉邸え 御夫人二逢、岡田良平邸え 御主人面会、一木喜徳郎邸 御主人、御夫人共面会、夕景帰宅ス。

四月十七日 辛未 金曜 晴。

来客、河内長野西代松本主計。

四月十八日 壬申 土曜 晴。

三条実美公ノ神道碑式に参列ス。義勇財団海防義会。本会金属製水上飛行機完成二付、小石川陸軍造兵廠ニ於テ観覧ス。宅にては例の光明会にて笹本上人の御講話あり。

四月十九日 癸酉 日曜 晴。

来客、佐藤かつら 其母と御礼に、高橋弘、照子供二人とも、梅子、律子。宮内黙蔵氏え書返ス。

四月二十日 甲戌 月曜 晴。

朝より来客引つゞき、夜迄。夕飯之時、ふとのとにつまる。いたみ長し。早速、井深氏来

りて漸いたみ止る。

発信 朝、房州万里伯え手紙出ス。

*のと(咽) *いたみ(痛み) *いたみ止る(痛み止る)

四月二十一日 乙亥 火曜 晴。

微恙にて臥。竹内来る。来客、土井田鶴子。

四月二十二日 丙子 水曜 雨。

此朝、太田早苗と嘉子、南部より無事高田馬場二着の由申来る。此夜八時過御着、姉小路良子様御無事御着。汽車所迄、李子、朝くら御迎ひに行。わか校五十年史今出来する。

*朝くら(朝倉) *わか校(我校)

四月二十三日 丁丑 木曜 雨、陰。

(コノ日、記事ナシ)

(四月二十四日、記載ナシ)

四月二十五日 己卯 土曜 予記 わか校創立満五十年記念祝賀会。

*わか校(我校) *記念祝賀会(記念祝賀会)

四月二十六日 庚辰 日曜 雨。

(コノ日、記事ナシ)

四月二十七日 辛巳 月曜 晴。

昼早々より御礼廻り。東宮御所、宮城参内 御内儀えも、閑宮様、東伏見様、久爾宮様、梨本宮様、秩父宮様、高松宮、山階宮、加藤総理。

*久爾宮(久邇宮)

四月二十八日 壬午 火曜 晴。 予記 松平康邦氏と広橋寿子と結婚披露会、本日午下

三時より五時迄、茶会、華族会館ニテ。

朝九時より自動車にて御礼廻り。北白川宮、竹田宮、浅香宮、賀陽宮、内大臣植野氏、伏見宮ハ使者を出す。

*浅香宮(朝香宮)

(四月二十九日、三十日、記載ナシ)

(五月)

五月一日 乙酉 金曜 晴。 予記 三条公憲公一週年祭、朝九時。朝八時半、車にて護国寺え墓前祭に参拝す。午下四時より姉小路良子様を問ふ。暫時閑談、時を移す。

*一週年祭(一周年祭)

五月二日 丙戌 土曜 晴。 予記 階樂園にて慰労会、学校職員を招待す。正午より階樂園にて午飯会、学校職員を招待す。凡三十人計、支那料理実に美味にて、三時迄に済て帰。

*階樂園(階樂園)

五月三日 丁亥 日曜 陰。 少雨あり。朝より終日揮毫ものす。来客、稲葉隆子さま、御たのみものに。

五月四日 戊子 月曜 雨。

来客、大谷婦人会々長正親町綾子さま御出にて、九日大会に付出席を御たのみに相成たり。

五月五日 己丑 火曜 晴。

朝より献上になる五月晴のうた、懐紙、外に色紙等かきあくる。

高田え夏のうちきたのむ。

*うちき(桂)

五月六日 庚寅 水曜 晴。 予記 帝劇え李子、姉小路良子様、御招待いたしたり。

朝より揮毫ものす。午下早々、参内ス。此度の大銀婚御式典を仰奉りて、

鶴亀もちよ万代をさくらむわか大君の大みみ契りと

銀地大色紙にかきてたてまつる。花松典侍さまより献上方を願ふ。後の宮よりけふは逢ふ事か出来ぬと仰せられて、思召にて摂政殿下、すみの宮殿下御参り故、拝謁を仰せ付られて御二方様に拝謁する。けふは何といふ幸ある日かと、有かた涙なり。三時退出。

此日四時比より鳥尾子え行、八時帰。

*けふ(今日)

五月七日 辛卯 木曜 晴。

朝よりさ々木氏えゆき、帰途、中島徳先生訪問して種々閑談、時を移して帰。

五月八日 壬辰 金曜 雨。 予記 \ 愛国婦人総会、午前八時半迄に。李ハ出席ス。
朝八時、典侍良子様御入臨にて、生徒の体操より御覧にて、授業の模様不残、食堂、湯と
の迄、寄宿舎不残御見せ申上で、わか宅にて種々の御はなし、御昼餐をさし上候。公正さ
まも御出て、此時雨ふり出して、是より代々幡え御出二付、自動車申付て御帰に相成たり。

*さゝ(佐々)木氏 *体操(体操) *湯との(湯殿)

五月九日 癸巳 土曜 晴。 予記 大谷婦人会、午前十時より春季大会、会費五十銭。

五月十日 甲午 日曜 晴。 予記 銀婚大祝典の盛日なり。

五月十一日 乙未 月曜 晴。

(コノ日、記事ナシ)

五月十二日 丙申 火曜 晴。

朝、姉小路様え参り、良子様十四日御帰京ニ付御暇乞を申上る。暫時御咄し申上て帰宅ス。

五月十三日 丁酉 水曜 晴。 予記 帝劇え招待日なり。

来客、竹内増子来る。午下三時半より自動車にて帝劇え行。松花会、若松会々員見物、忒
百三十人と云、可驚。森氏えのため也。午前午前(ママ)号外にて熊谷町二千戸焼く、
大驚。郵便、電話、電報不通にて石坂氏え先尋たれハ少し隔りある様にて先々大丈夫かと
云事也。

五月十四日 戊戌 木曜 晴。

来客、竹内氏。午下、鳥尾子え行。少し風心地にて臥。

五月十五日 己亥 金曜 雨。

終日臥専ス。さゝ木氏総会、たにさく、会費拾円を送る。

*さゝ(佐々)木氏 *たにさく(短冊)

五月十六日 庚子 土曜 晴。

朝より伝法大師御絵典の前書に上宮廟献詩の章をかく。是にて御絵典の詞書すへて決了す。

*伝法大師(伝教大師) *御絵典(御絵伝) *決了(結了)

五月十七日 辛丑 日曜 雨。 予記 竹柏会、午下正一時より、酒井伯邸内にて。

午下一時より酒井邸に行。此日、竹伯会、盛会也。

*竹伯会(竹柏会)

五月十八日 壬寅 月曜 晴。
光明会、午下一時より執行ス。

(五月十九日、記載ナシ)

五月二十日 甲辰 水曜 晴。
午下早々、鳥尾氏え行て帰。雨宮信、大坂より来る、一泊。

五月二十一日 乙巳 木曜 雨。
朝、神戸津田氏より鯛浜焼一尾着。雨。阪谷芳郎君より、余か母新刊、贈らる。

五月二十二日 丙午 金曜 晴。
発信 津田氏礼状出ス。

五月二十三日 丁未 土曜 晴。 予記 廿三日午後五時、帝国ホテル晚餐会、川崎卓吉、久枝康子結婚披露会。

○午下若松会、小石川大塚仲町三十六松平鱗子、
午下一時より。

午下一時より松平鱗子様邸にて若松会總會ニ出席ス。会員大勢集りにて、御場所御広く結構々々。名物なる書画帖拝見いたし、長唄の余興、是もまた結構々々也。五時帰。

五月二十四日 戊申 日曜 晴。

(コノ日、記事ナシ)

(五月二十五日、記載ナシ)

五月二十六日 庚戌 火曜 晴。

正午半より自動車にて代々木徳川頼倫侯告別式にて御焼香上て、帰途、玉枝と同車して跡見え寄。不計、棚はしあや子と来りて、久々謡ひたり。此日、角田氏の招待により七時迄に帝国ホテルえ行事二付、あや子と同道自動車にて行。角田氏の招待、何の為なるか不分なから、四三子の東伏見宮家御用掛になりたるの御祝かと被存。随分大せい五十人計也。食事も済て、九時頃四三子来り、挨拶などありて、退散、十一時頃也。

予記 午下〇時半より三時半迄、徳川頼倫侯告別式、代々木上原本邸にて。午下六時半帝國ホテルえ、角田氏より招待。

*棚はしあや子(棚橋あや子)

*招待(招待)

*招待(招待)

*招待(招待)

五月二十七日 辛亥 水曜 雨。 予記 鳥尾氏、欠席ス。
姉小路良子さまより菜の花漬一桶着。京都よりグリコラクチン半ダース着。

五月二十八日 壬子 木曜 陰。
(コノ日、記事ナシ)

五月二十九日 癸丑 金曜 雨。
終日揮毫ものス。

五月三十日 甲寅 土曜 雨。 予記 \ 午前十時より四時迄、代々木初台五二三川崎鎌
三郎にて、みとり会、御断。

大坂天下茶やより、そら豆着、返書ス。

*天下茶や (天下茶屋)

五月三十一日 乙卯 日曜 晴。 予記 東京美術学校校堂ニ於て授賞式、帝国学士院長
法学博士男爵穂積陳重、午前十時迄に。

朝九時半より上野美術学校二行。帝国学士院授賞式举行されたり。岡田文相、一木宮相、
其外学界之権威者之集りにて、受賞者四人也。加藤首相の祝辞より種々祝辞も有て、実に
名譽の事也。畢而茶菓ありて、已而帰、十二時也。午下富ヶ谷玉枝来りて棚はし (橋)
氏へ行と云。われも約束ありて三時頃より棚橋氏え。横川細君も来られて素語をうたふ。
晚餐を呼はれて九時帰。

*校堂 (講堂) *棚はし氏 (棚橋氏)

(六月)

六月一日 丙辰 月曜
早起。仏前を清めて礼拝す。終日揮毫ものス。夜、甘利氏来る。

大阪美尾の順よりさや縁豆着。直ニ返書ス。

*美尾の順 (美尾野順) *さや縁豆 (さや豌豆)

六月二日 丁巳 火曜 陰、雨又晴。
大阪唯専寺より、そら豆着。直ニ返書ス。

六月三日 戊午 水曜

陰、晴雨不定。鳥尾子え行而帰。雨宮帰。

六月四日 己未 木曜 晴。

午下一時より参内ス。花松典侍様、正親町典侍様、園祥子様、佐分利さまに御目にかゝる。坤宮様御養蚕所ニ成らせらるゝに付、御同所え参るへき様仰戴きたるに、今日は得参らずと申上て、種々御咄し共同申上て、坤宮様より此度銀婚の御式典に付、白御羽二重一反と象牙細工の寿老人とを拝領いたし候。

六月五日 庚申 金曜 雨。

終日、金色紙揮毫ス。

六月六日 辛酉 土曜 晴。 予記 松花会、午下一時より石井氏宅にて。

午下一時より、予、李子、同車にて石井氏に行。会員みな御集りにて、洋館休憩、広間にて萩岡の此度銀婚の御式典ニ付、予の作歌の五月晴のひらき也。実に作曲の苦心頭はれて中々の大もの也。みな聞入て感し入たり。支那人の手品なども有て盛会也。五時過帰。

六月七日 壬戌 日曜 晴。

母の祥月御明日にて光円寺え御墓参りして帰。午下より川はた子え行て帰。夕方より御念仏修行する。李子、愛子、二ノ宮より帰。

*御明日(御命日) *川はた子(河緒子)

六月八日 癸亥 月曜 晴。

午下草々、高輪毛利公え訪問する。早速公爵御夫婦様久々にて拝顔、種々の御閑話、御合のものなといたゞきて、それより御後室様え参りて御見舞申上ル。やはり御足部御いたみ等も御ありにて御躰臥のまゝ御目にかゝりて種々御はなし申上候。御気分は先々平常通りの様にうかゞはれる。此時、徳山子の奥方御出にて御間のものなど共にいたゞきて、それより帰。

*午下草々(午下早々)

六月九日 甲子 火曜 晴。 予記 白石菊子より紹待日也。

午下三時より、予、李子同道にて飯倉白石氏え行。此住宅は殊の外立派する家造りにて、庭園も実に高見にて、山あり、樹木、巨石、位置よく名園なり。茶席にて謡の本など、すへてあるし菊子の謡の研究家らしくて。菊子とはしめて素謡、先熊野をうたふ。清之の御弟子也とてよく謡はれたり。琵琶の教女子の演奏あり。是また上手なり。六時過、二階の広間にて食事。食事も中々に結構、こりたるもの也。おもはすみな感心々々。相客は三宅竜子、鉄千代、中村幸子、石井たか子、六人也。他人交らず、大ゐに興深く、十時過迄。

*招待（招待） *立派する（立派なる） *こりたる（凝りたる）

六月十日 乙丑 水曜 晴。 予記 仏門に入りたる記念日、御念仏会修行する。

此日は記念日二付、夕景より竹内氏をまねく。此時丁度奈良の井上上人御出にて、夕飯を饗す。済て御念仏三昧に入る。十一時過帰。井上上人の御導師にてよく御念仏する。

六月十一日 丙寅 木曜 晴。

房州行決定して準備する。

六月十二日 丁卯 金曜 晴。

予、李子と下婢たけを連て午下一時五十分の汽車にて行。気候はよし、道すから田植前後にて田の面賑々し。六時過着。万里様みな御迎ひに来て下されました。地災後はしめて来ました。よほど復興も出来ました。伯様御悦ひにて何かと御行届にてかんし入候。一泊す。

*かんし入候（感じ入候）

六月十三日 戊辰 土曜 晴。

朝より海辺散歩して安房の浦なみ静にて心地よし。此日午後三時頃より伯様、栄、くわ、予、李子と行樂して木村やえ御招待相成。此旅館、新築出来上り立派に、客間の数も多くして、実に宏たいなるもの也。風呂場も静けつ奇麗にして、みな湯に入て大心地よし。ゆる／＼遊ひて、夕餐を饗せられて、実愉快々々、珍らしき事也。十時帰。御茶席にて御茶いた／＼。二泊。

*宏たいなる（宏大なる） *静けつ（清潔）

六月十四日 己巳 日曜 晴。

朝より揮毫ものす。昼飯後、帰途の準備にて、赤飯ふかし、其外鯛の焼付やら種々土産ものにて、中々にいそかし。三時汽車にて帰る。薄日にてあつかす寒からず、実に天氣の都合よろしく、全く天の御加護といふへし。有かたし／＼。七時半着。自動車迎ひ来りて帰。留主みな無事。それより一同赤飯と鯉（ママ）の焼付にて食事、大にき／＼し。

六月十五日 庚午 月曜 雨。

昨夜よりの雨にて実に天の御たすけ、かんし入たる事共なり。父の祥当二付御念仏三昧会執行、御供養、名々弁当、キガラ茶飯に御にしめ。

*かんし入たる（感じ入たる） *祥当（正当） *名々（銘々） *キガラ茶飯（黄枯茶飯）

六月十六日 辛未 火曜 晴。 予記 十六日より十八日迄、浅草別院におゐて前法主御

三年忌。

朝より揮毫ものす。万里様御礼状、尾鷲土井氏え、福岡宮川氏、善光寺花真さま、佐藤さ
た子え書を出す。現代雑誌になすとそら豆揮毫ス。

*なす(茄子)

六月十七日 壬申 水曜 晴。 予記 \ 浅草地明会。 \ 善光寺婦人会、午前十時より。
午下より鳥尾氏え行、六時過帰。

六月十八日 癸酉 木曜 晴。

朝より御仏前御せうごんして、本日光明会執行。午下三時よりか、一時より続々御来集に
て御念仏三昧に余念なく、三時に田中又先生、さゝ木上人丁度御出京中にて御出下され候
て、御講話もなし下されて実に有かたく、昨年今日御出席にて、御結縁の御はなしもあり
て、案外結構と存候。六時畢。

*せうごん(荘嚴) *さゝ木上人(佐々木上人)

六月十九日 甲戌 金曜 雨。

兵庫の鷺尾道子、きよさんと御出に相成たり。基威氏紹介ながら得対いたさす候。

六月二十日 乙亥 土曜 小雨。

天下茶や田中氏え返書。鷺尾道子え品もの贈る。

*天下茶や(天下茶屋)

(六月二十一日〜二十七日、記載ナシ)

六月二十八日 癸未 日曜 晴。 予記 かねて約ありたる鳥尾子爵家にて念仏会を催さ
れたり。広島さゝ木為興氏出席されたり。余は不参す。

微恙にて臥す。朝、天下茶や田中夫婦と悴と来る。今晚の汽車にて帰阪するといふ。依頼
の箱書附も漸渡す事に成りたり。来客、安田善三郎氏、ふと北海道より鷺田通義氏着。李
子は鳥尾子え行く。

*天下茶や(天下茶屋)

六月二十九日 甲申 月曜 晴。

けふは空も清々し。今年の梅雨は誠にすか〜(し)き氣候にて、雨もありてよき梅雨
気である。けふは起て、学校職員一同に叙勲の品もの、男子方浴衣地、女子方には半襟を
進したり。夕方一寸雨ふりてすく晴たり。

*けふ(今日) *けふ(今日)

六月三十日 乙丑 火曜 晴。

朝、例の如く起て、献上の汲泉やらを典侍さま方えの進しものやらにていそかし。鷺田通義、昨夜一泊せられたり。今夜十時の汽車にて帰られるはつてある。

*はつ(管)

(七月)

七月一日 丙戌 水曜 雨。

この夜十時の汽車にてわし田氏帰。もゝ子、上野迄送ったり。

*わし田氏(鷺田氏)

七月二日 丁亥 木曜 晴。

朝、さゝ木氏へ行。

*さゝ木氏(佐々木氏)

(七月三日、記載ナシ)

七月四日 己丑 土曜 晴。

植木や庭造る。正午より後藤朝太郎氏来校。支那民情の講話にて凡三時間也。

*植木や(植木屋)

七月五日 庚寅 日曜 晴。

朝八時半より大久保歯医師へ行。帰、揮毫ものス。夜、高橋弘来る。午下より閑院宮え参る。御二所殿下に拝謁して何かと御咄し申上候。御合のもの戴て帰。植木や来る。

*植木や(植木屋)

七月六日 辛卯 月曜 陰。

朝より揮毫ものス。植木や来る。庭造りする。

金無地色紙拾枚注文。五円五錢也。岐阜北長森足立絵絹店。

*植木や(植木屋)

七月七日 壬辰 火曜 晴。 予記 \ 午下一時半より牛込常楽寺にて地明会の謝恩会を開かる。

七月八日 癸巳 水曜 雨。
朝、高橋輝来る。午下鳥尾子え行。帰り途中雨。

七月九日 甲午 木曜 晴。

朝、大久保氏に行。先々齒出来上る。然し未だ寛全せず。中元の祝義もの準備する。
*寛全(完全)

七月十日 乙未 金曜 雨。

朝より終日雨ふる。井深氏診★(目十察)を乞ふ。

*診★(目十察)(診察)

七月十一日 丙申 土曜 陰。

朝より大久保え行。齒の上下とも出来上る。それより河はた氏え行而帰。午下三時半より、予、李子と帝劇え行。十一時過二帰。此時、雨。

*河はた氏(河鱸子)

七月十二日 丁酉 日曜 雨。

終日ふりつゝきたり。来客、甘利氏。

七月十三日 戊戌 月曜 晴。

(コノ日、記事ナシ)

(七月十四日、記載ナシ)

七月十五日 庚子 水曜 晴。

(コノ日、記事ナシ)

七月十六日 辛丑 木曜 晴。

未だ蓐上を離れかたくて。来客、房州より万里栄女、鳥尾子、泰子、智恵子。
広島松島より鮎の味淋漬。

*味淋漬(味醂漬)

七月十七日 壬寅 金曜 晴。

朝より小包物こしらへにかゝる。微恙も大ていよくなりて蓐を離れたり。
発信 広島松島え。岡山波多野花涯え。富ヶ谷跡見玉枝え。

七月十八日 癸卯 土曜 予記 葉室伯二女結婚披露会、華族会館にて、午下五時。午下二時より光明会執行。田中木又君講師にて、御念仏三昧、殊の外大勢にて修行いたし候。

(七月十九日～二十四日、記載ナシ)

七月二十五日 庚戌 土曜

李子、すみ子同道にて今晚十時発汽車にて札幌へ出立する。

毛利安子様廿五日御逝去。三十一日午下二時より三時半迄、高輪本邸にて告別式。

(七月二十六日、記載ナシ)

七月二十七日 壬子 丁未 月曜

五島善子、毛利邸へ今晚御夜ときに行に付、御玉串拾円を持参をたのむ。

七月二十八日 癸丑 火曜 晴。

朝より起きたれと午下蓐に臥す。中島先生御出にて、岩田氏も来る。幸の事故、岩田氏に診★(言十察)を乞ふ。是ハ腸の病てなく腸の弱りたる也。早速水瓜を取よせ一寸角よと(ママ)塩と砂糖をつけて食ふ。是にて人に逢ふてもつかれはない、食事ハ粥などはわるひ、あたりまひの飯にてもよろしく、食事ハ何をたへてもよいと云、是ハ年のかげんにて是からハよくなると云。たちまち気分もよくて夕食ハ飯をたへる。来客、寿子、栄子。中島先生大画箋(一牋) 墨竹と秋草小鳥。光明皇后御歌鶯箋全紙三枚持帰られる。

* 診★(言十察) (診察) * 大画箋(一画牋) * 鶯箋(一画牋)

七月二十九日 甲寅 水曜 晴。

朝起て大ゐに気分もよろしく。京都高倉寿子え書をよす。宮内省正親町さまえ暑中の文と品物出す。月寒もゝ子え書を。李子、すみ子より青森よりはかき着。井深氏薬、本日よりやめる。

* はかき(端書)

(七月三十日、三十一日、記載ナシ)

(八月)

八月一日 丁巳 土曜 晴。

此日夕方より甘利氏来る。井上八重琴、朝くら三弦にて、此暑中休暇を利用して四季声を上ケ様と云ふ。

*朝くら(朝倉) *上ケ様(上ケやう)

八月二日 戊午 日曜 晴。

○此夕、竹内氏来りて、治療をたのむ。

八月三日 己未 月曜

○此朝、竹内氏来る。

八月四日 庚申 火曜

○朝、竹内氏来る。

八月五日 辛酉 水曜 雨。

朝三時比より雷鳴はけ(し)く夕たち雨も強くふりて落雷も所々に有かと思ふ。夜明て雨もしとふる。

○朝竹内氏来る。

李子は今に便なくて、病人もありやと考えらる。午後二時頃、はしめて端書着。七月廿九日朝出したるわか文を見て安心、廿八日月寒え着いたらしい。廿九日ハ一日休息して、三十日に見物に出かける筈、静子、子供抱きてつまつき、為に発熱もひとく、大心配、直に札幌病院に入院といふさわきにて、八月一日に子供追々よろしく、乳をのむ様になりたりと。李子付添て行次第、こゝ四、五日ハ帰京難くやに候。志賀鉄千代さま御出にて、伊香保にて閑院宮様御用邸に御機嫌伺たるよし承り候。

*わか文(我文)

八月六日 壬戌 木曜 雨。

朝雨、午下雨止たり。

○竹内氏来る。此日はしめて形のある梅肉様の三ッ便出たり。七月はしめ今日にて大く有かたき事二候。

八月七日 癸亥 金曜

○朝、竹内氏来る。

○夜、甘利氏きたる。

八月八日 甲子 土曜 立秋。晴。

晴。立秋の日にてはつ秋風ふき来る。来客、松平寿子、堀田伴子さま御出にて。此時李子より端書着。昨日、子供退院いたしたる由、先々安心。日々此月寒の不便さハとても想像外にて札幌迄ハ二里半余、電車も汽車もなく、日々自動車を札幌より電話にて呼よせると云、つまらぬ費用に馬鹿らしく、見物する勇氣もなく早う帰りたい、六、七日頃には出立いたす心組と云。

○昨日午睡の夢に、月の清き事真澄の鏡懸たり。我身の側に月出たり。【図アリ】

此夕、高はし（橋）弘来る。

○竹内氏来る。

*昨日（此日） *側（ソバ）

八月九日 乙丑 日曜 晴。

八十五度。秋暑、はしめてあつし。

○竹内氏きたる。

八月十日 丙寅 月曜 晴。

此夜、竹内氏来る。甘利氏も来る。李子八月八日出は書着。愈十一日朝帰京、迎ひは断ると云。

*は書（端書）

八月十一日 丁卯 火曜 晴。

朝四時頃より起て、李子帰着を待つ。やはり八時四十分上野着にて、九時帰着。先々無事の貌見て大々安心々々。

○竹内氏来る。此朝はしめてよき便通ありて歓喜々々。

八月十二日 戊辰 水曜 晴。

物置掃除日也。

八月十三日 己巳 木曜 晴。

朝より物置の掃除にて大いそかし。予、微恙にて臥ス。房州万里栄女来る、一泊。伊香保御用邸御滞在の閑院宮殿下え小包にて御せんの類献上する。

*御せん（御煎）

八月十四日 庚午 金曜 雨又晴、不定。

折々の驟雨、暗黒天。栄女、早朝より通敏氏に行。

八月十五日 辛未 土曜 雨又晴。

此朝、すみさま帰房する。宮内黙藏先生よりは「端」書来着。春以来大病之由、御気の毒ニ存候。

*は書「端書」

八月十六日 壬申 日曜 雨。

驟雨つよく、また晴たり、不定。此朝、隣ののり重名古屋より無事帰宅。宮内先生見え舞と書状出す。夜に入て豪雨甚しい。

*のり重「憲重」 *名古屋「名古屋」

八月十七日 癸酉 月曜 晴。

早起。けふハ先々晴らしひ、風あり。夕景より甘利氏来り、みな稽古する。此夜十二時頃より腹痛にてくるし。李子、起て来て看護する。この腹痛ハ稽古のこりてあらうと云ふ。三時頃よりいたみもとまる。一睡する。

*けふ「今日」 *こりて「凝りて」

八月十八日 甲戌 火曜 晴。

臥蓐する。長尾雄氏来る。夕景、収一氏、私の病気をあんして来る。是は食物に限るとて、今より半つき飯に黒こま塩をよくすりて飯に合て、夕飯に御結ひ一箇、梅肉一ツ、晩茶に醤油一たらし、先一合位、食後一杯、外に何も食するもの一切なし。是にて一週間を通する、全快凝「疑」なし。

(図) 御結ひ。

*あんして「案じて」 *黒こま「黒胡麻」 *凝なし「疑なし」

八月十九日 乙亥 水曜 晴。

けふ「今日」は本天気、清暑と云ふ。早起して如例。気分もよろし。朝、長尾雄来りて、容体いかにと父の使に来る。御父の示命通りいたして居る、御安心をといふ。

八月二十日 丙子 木曜 晴。 予記 隣ののり重、名古屋支店に榮てんする事に決定する。全部名古屋やえ行事になる。

天気清暑。朝、気分ハよいけれど、食事加減ひよろしく然として、けふもこの食事に従事する。

六ツと四ツ三ツとひとつの愛し子を守らせたまへわか大御おや此哥をかきていく子えさつける。夜、甘利来る。

*のり重「憲重」 *名古屋「名古屋」 *榮てん「榮転」 *名古屋「名古屋」
*さつける「授ける」

八月二十一日 丁丑 金曜 晴。

早起す。食養療治法第三日目。朝、姉伯来。河はた為子来。

*河はた為子（河鱒為子）

（八月二十二日～三十一日、記載ナシ）

（九月）

（九月一日～十九日、記載ナシ）

九月二十日 丁未 日曜 彼岸の入り。

（九月二十一日～三十日、記載ナシ）

（十月）

（十月一日～十六日、記載ナシ）

十月十七日 甲戌 土曜 予記 十月十七日より青山善光寺にて五重講縁、岩井智海師より。

（十月十八日～三十一日、記載ナシ）

（十一月）

十一月一日 己丑 日曜 陰。

来客、○竹内氏、長尾氏、三宅花甫、志賀鉄千代、はしめて面会ス。

*三宅花甫（三宅花圃）

十一月二日 庚寅 月曜 陰。

来客（以下、記述ナシ）。

十一月三日 辛卯 火曜 天晴朗。

○竹内氏来る。長尾氏、修学旅行止る。井深、代理する。夜八時四十分汽車発、五年生修学旅行出発。惣勢九十六人也。来客、加藤幸子、はしめて面会ス。

十一月四日 壬辰 水曜 天晴朗。
五年生、伊勢神宮参拝。来客、○竹内氏。
朝日を拝む。

十一月五日 癸巳 木曜 晴朗。
日の出を拝む。

十一月六日 甲午 金曜 天晴朗。
来客、中島徳蔵氏、津田よし子。五年生、桃山参拝、京都着。
日の出を拝む。

十一月七日 乙未 土曜 天晴朗。
来客、目黒氏、生鮭一尾。竹内氏、本日より大坂へ行。
朝、日の出を拝む。

十一月八日 丙申 日曜 天晴朗。
五年生、江州より大津に四時七分着。伊勢神社え花蹊の病気を信願して、太々神楽を上て、その神饌物種々と御守札等着す。
日の出を拝む。

*信願(心願)

十一月九日 丁酉 月曜 天晴朗。
修学旅行、朝六時四十分東京駅無事着。一週間の旅行、晴天珍ら敷、一人の病人もなく、有かたき事共也。
日の出を拝む。

十一月十日 戊戌 火曜 天晴朗。
来客、堀田伴子さま、白石菊子、面晤す。
日の出を拝む。

十一月十一日 己亥 水曜 天陰、雨と成る。
来客、斎藤菊寿氏、修学旅行の報告す。

十一月十二日 庚子 木曜 天晴朗。
来客、竹内ます子。
日出を拝む。

十一月十三日 辛丑 金曜 天晴。
来客、迹見のり重、名古屋より着、一泊ス。
日出を拝む。

*迹見のり重(憲重) *名古屋(名古屋)

十一月十四日 壬寅 土曜 天晴。

朝九時、竹内氏、大坂より着、鱧を持参す。午下二時頃、皇后陛下より御使として、皇后宮属久保田又三郎氏御見舞、御下賜品、御新刊大和こゝろ美本、御野菜人參一わ、唐菜一わ、八ッ頭種数、御果物梨子一籠、其味天下一品、新宿御苑に行啓にて、御とらせられたるを賜りたり。御花たりや数種、外珍花数種と、この思召さまを拝賞して、感泣の涙せきあへず。冥加至極とて、人々にもいたゞかせたり。
日の出を拝む。此夜、のり重、帰愛する。

*一わ(一把) *一わ(一把) *種数(数種) *たりや(ダリア) *のり重
(憲重)

十一月十五日 癸卯 日曜 天晴。

○来客、竹内氏。
日の出を拝む。

十一月十六日 甲辰 月曜 天晴。

○竹内氏来る。
日の出を拝む。

十一月十七日 乙巳 火曜 天晴。

○竹内夫婦来。
日の出を拝む。

十一月十八日 丙午 水曜 雨。

七月よりはしめて光明会執行。午下一時、笹本上人御来会にて、わか為に種々御親教ありて有かたく。念仏会、会するもの三十人余ニ(空白)、盛会也。夕五時済。

十一月十九日 丁未 木曜 天晴朗。

○夢に、加様なる美味の物をいたゞく。其甘き事譬るに物なし。是か三昧発得か。色白くして和らかく。(図)

日の出を拝む。

十一月二十日 戊申 金曜 晴。

○昨夜の夢のもの、実に何と申ものかと伺しに、みたの妙味と仰せられたり。

日の出を拝む。

*加様なる(斯様なる) *みた(弥陀)

十一月二十一日 己酉 土曜 晴。

来客、万里伯、久々にて、京都の御咄し共にて時を移す。午下、栄女も来る。

○竹内来る。

日の出を拝む。

十一月二十二日 庚戌 日曜 晴。

日の出を拝む。

十一月二十三日 辛亥 月曜 晴。

午下一時四十分発、万里伯帰房。

○竹内氏来る。

日の出を拝む。

十一月二十四日 壬子 火曜 雨。

(コノ日、記事ナシ)

(以下、記載ナシ)

大正十四年

一月より、人力車

一月十四日

偕行社行 上下

二月十六日 自動車

帝国ホテル 五島、加茂

二月十九日 車、上のみ

同 前田、酒井

二月廿一日 自動車

同 井上

二月廿六日

紅葉館 渡辺子、林氏

三十一日
 外の自動車にて 是より帝国ホテルえ
 上野美術学校行 上下
 棚はし氏行 上下 *棚はし氏(棚橋氏)

六月より
 三日 かね庄 鳥尾子行 上下
 四日 同 宮中参内 上下
 六日 タクシ 石井、松花会え 上り
 八日 かね庄 毛利様え 上下
 九日 タクシ 白石菊子行 上り
 十二日 タクシ 房州行
 十四日 タクシ 房州帰り

七月より
 二日 さゝ木え行 上下
 五日 大久保え行 上下
 同日 閑宮様参殿 上下
 八日 鳥尾子え行 上下
 九日 大久保え行 上下
 十一日 大久保氏え行 上
 同日 河はた氏え 下 *河はた氏(河鱒氏)
 同日 タクシ 帝劇行 上下
 十三日 \春日 \竹田宮、北白川宮え 上下

病中の作
 あたゝかきみ親のみ手にいたかれてこゝろのとかにわつらふわれは *こゝろ(こゝろ)
 閑院宮妃殿下より松の盆栽を賜りて
 賜りし巖に生ふるいきの松千とせのひよの御声聞えて
 落葉しく老木の松も春の来て若かへりたるちよの初声
 河水清
 天地と共に久しきみ川水清きは国の光なりけり

大君のみいつの光り川々の水の色にも水の声にも

水なれや水ならなくにみ川水の生うみなしませるいかし国内を生かし

中川いく子刀自

喜の声ハ内外に満ちわたり君中川のつきぬなかれに

千田勇子

喜ひは 千田の足り穂の穂に出てゝいくちよ秋の栄えみましや
君こそは 黄金花さく千五百の秋を

いく千代 秋のたり穂見ましや

千田

黄金色の波もよせ来て秋の田の千田の栄えはちよも見ましや

河水清

汲上て五鈴の川の若水を神のみ前にさゝくかしこき *五鈴 (五十鈴)

濁さしな四方の川々水すみて君と臣とのこゝろひとつに *濁さしな (濁さしな)

(以下、李子筆カ)

五十鈴の宮、閑院宮妃殿下より松の盆栽を給はりて

給はりし岩ねに生ふるいきの松千とせのひよの御声きこえて

落葉しく老木の松も春の来てわかかへりたる千代の初声

河水清

わか水を手にくみあけて五十鈴川神にさゝけむ清きこゝろを